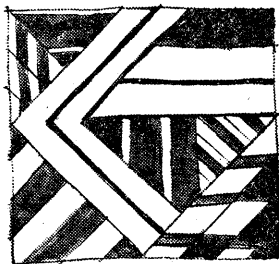


エリクソンと幼児教育 (18)



仁科 弥生

同一性の形成 アメリカの場合(三)

前回につづいて、同一性拡散状態に陥った青年たちの症例研究において、エリクソンが示した鋭い洞察と卓抜した見解の中に、われわれの今日的課題の解決のための示唆を求めてみたい。

エリクソンはその臨床経験から次のような注目すべき視点を手に入れている。まず彼の言葉を引用しよう。「治療上の問題は、青年がいかなる環境に適応すべきであったのか、そしてそれがなぜできなかったのかという問いを超え、むしろ青年が自分の内面の統一性を失わずに用いる適応のいろいろな方法を設定することに関わっていくこととなる。その治療と自分の目標とを知ったら、青年はその環境を自分に適応させることが十分できるようになるはずである。これこそダーウィンやフロイト的なイメージの通俗的な解釈に欠落していた視点、人間の適応の本来的なものに他ならない」(『青年ルター』前掲書)。このように、エリクソンは人間をただ一方的に社会のシステムによって支配されているものとしてとらえることの危険を指摘し、また人間を主体とする適応のあり

方を強調したのである。それは独自の個としての人間の存在を無視する方向へつきすすむ社会のあり方を問い直すことの必要性を説くものであり、また同時にアメリカだけの特殊現象ではない現代の人間疎外の社会に対する警鐘でもあるといえよう。そして、彼のこの見解は、さ

らに『自我同一性』の中で、精神分析学そのもののあり方を問う重要な視点となって展開されている。たとえば、精神分析理論の中心にある「現実原理」という概念について、それが実際に用いられるときにきわめて曖昧なものになりやすい点を彼は指摘する。すなわち「理論上も治療上も、現実原理とは一定の個人主義的色彩をもっていて、それによれば、よいこととは個人が法（それが強制されるものである限り）と超自我（それが不快をもたらずものである限り）とから身をかわしてうまくやり通すことのできるようなものである。……しかし、西欧の人間は自分の意志に反してまでもより普遍的な集団同一性を発展させようとする。つまり、このような西欧の人間の現実原理は社会原則を含むようになる」（『自我同一性』（前掲書）。その結果、この社会原則によるよいこととは一体、何なのであるか、また、分析家が個人

の適応を問題にするとき、個人がいかにかうまく彼の属する社会の慣習や価値観と折り合っているかということの評価するが、その社会の側に重大な問題がある場合はどういうことになるのであろうかなどの疑問にわれわれは直面することになるというのである。

さらに、自我の概念づけに関して、自我の諸機能を、機械装置のように正確に機能させるために、感情から独立させようとする傾向に対しても、エリクソンは次のように批判的である。「すでに機械化に心を奪われてしまった現代文明の産物である現代精神は、『心的メカニズム』を探求することによって自分自身を理解しようとしていている。もし自我そのものが機械的適応を切望するようになつたら、われわれは自我の本性そのものを扱わないで、その研究に対するわれわれ自身の機械論的アプローチや、その時代に束縛された順応の一つを扱うことになつてしまう恐れがある。……精神分析の貢献の有効性は、限られた条件への単なる適応を超えて、原始的な恐怖でくもらされている可能性を患者たちに自覚させるという目的に臨床経験を適用しようとするねばり強いヒューマニスティックな努力によつてのみ、はじめて保証さ

れる」(『自我同一性』)。これはとりもなおさず、精神分析理論や分析家が社会や時の為政者によって利用されてしまうことの危険性を指摘したものである。

そして以上のような観点から、エリクソンはアメリカの社会と青年について次のような分析と提言を行なっている。

アメリカの家庭生活では、外見よりもはるかに色濃いた民主主義がはぐくまれている。たとえば、そこでは家族の一人一人が——両親も含めて——他の誰からも支配されることのないように、各人の権利を守るための訓練がなされている。その場合、各人の利害関係や衝突をこまやかに調停するのは母親である。彼女は、いわば一党にかたよらない、利害関係を超越した存在として、各人の利益ができるだけ強く発展するように面倒をみる。エリクソンは、そのような民主主義の家庭にみられる、家族の行動を説明する一つの原理を指摘する。すなわち、家族で行なう活動はみんながしたいと思っていることを表わしているのではなくて、行なうことが可能なことの中で、家族の全員にとって受入れがたい度合いのもっとも小さいものであることを表わしているという。勿論、

このようなくみも、もっともらしい既得権や特殊な権利などが少しでも絡んでくると、たちまち混乱する。そして問題の解決にあたって、「多数の意見の一致」をみれば、たとえそれが不承不承に得られたものであっても、家族としては成功である。しかし、一つの利益団体——それが両親であっても赤坊であっても——に有利な決定がしばしば行なわれていると、次第に家族としての統合は損われていく。また、家族は一人一人が、年齢の違いや、強さ弱さなどに基づいて種々の特権を要求することのできる同等でない者として細かく分割されている。したがって、家庭生活は異なる利害関係に寛容になるための訓練の場となる。そして家庭内でのあからさまな憎しみや争いは稀なものとなる。しかし、家族全員にとって受入れがたくはない利害関係というものは、ともすれば真剣な論争を欠く領域になりやすい。そこで、家庭生活は、一人一人が互いに交わることなく白日夢にふけるための制度となり、家族の間の心理的つながりは一層稀薄なものになっていく。このように、エリクソンはアメリカの民主的な家庭生活にひそむ落とし穴として、情緒的な一体感をもつ人間関係の確立のむつかしさを指摘

している。

さらに、エリクソンは、「摩擦なしに機能を發揮する」という機械の理想が、家庭の外の民主的な環境を毒している事実にも言及している。すなわち、大人は自由な選択ということをするが、現実の世の中は、あからさまな摩擦を避けるために物事を「調整する」ところであると、子どもたちは見るようになる。エリクソンは、ここに若者の政治的無関心が蔓延する土壌があると考え、そればかりではない。機械のもつ拘束的な力に対して頑強な抵抗を示したジョン・ヘンリーに象徴されるように、かつてのアメリカ人は、人間が機械によって支配されることを恐れてきた。しかし今日のアメリカには、どんな専門職にも独裁的なボスが存在し、また人々を管理する組織化された強力な機構があるにもかかわらず、人々はそれらに対して鷹揚であるとエリクソンはいふ。とくに、今日の若者たちの多くは、彼らの祖父や父親とは違って、物事を自由に表現する機会は非常に豊富だと感じているので、自由であるということが何らかの自由であるのかわからない。また、独裁者は誰なのかという認識さえもっていない。したがって、彼らは理論的に

は独裁者を憎むが、ボスの支配を構成するボス族に対してはきわめて寛容であるとも指摘する。

エリクソンによれば、ボス族は新しいタイプの独裁者であるという。彼らは自分たちを自力でのし上った成功者であり、民主主義のはなばなしの成果であると考えている。そして「うまくたちまわること」つまり機能することだけを他の何よりも価値あるものとみなし、立法機関や産業、出版界、芸能界などの分野で独裁的な権力を行使できる立場をたくみに利用し、さらに複雑な機構を隠れみのにして、きわめて素朴であり、また他人に対して公平であろうとして自己抑制的になりがちな民主主義の息子たちを籠絡する。

エリクソンは、このような無責任な独裁の有害なモデルを提供するボス族と、情緒的な側面を排除し、機能的な面のみを強調する機械主義とが、アメリカ人の自律性や自発性という同一性にとって危険な存在であり、また青年の同一性拡散の葛藤をより深刻なものにする社会的要因であるとみなしている。そして、民主主義そのものの健全さのためには、自主独立を誇り、自発性に燃える青年たちの知性とエネルギーが必要であり、それには若

者がまず「ボス制度」や「機械や機構」の危険性に気づくことであると主張する。そして彼らが自分の利益のために「機構」に従属しなければならぬという根づよい考え方から解放されることによって、新しい、活力に満ちた同一性を獲得することが可能になるであろうと提言している。同時に、青年の自由な人間としてのゼスチュアが空虚なものに見えてしまう事態や、青年たちの人間に対する信頼が錯覚であり、無駄であると思わせるような事態から彼らを守ることが大人の責任でもあると強調している。（『幼児期と社会』一九五〇年）でなされたこのような指摘は、一九六〇年代のアメリカの大規模な若者の反体制運動を予見するものでもあった。

以上のように、エリクソンは、アメリカの青年の同一性の喪失についての考察の中で、母親の支配的で拒否的な態度という精神医学的「問題」や、父親の側の「障害」が子どもの自我の発達に影響を及ぼす要因であることを明らかにした。しかし同時に、それらが唯一の要因ではないことも指摘したのである。すなわち、精神医学関係者たちが「母親の拒否的態度」を情緒障害の病源とみなして、冷淡で支配的な母親を非難する論調に対し

て、エリクソンは、母親たちにそのような拒否的態度をとらせたものが何であったのかを説き明かし、果たしてどこまで母親たちは責められるべきであろうかと問い、むしろ、彼女たちがそうした形で社会に協力することを強要した産業社会のあり方をこそ問題にすべきであると主張したのであった。これは、個人の心理的葛藤がいかに歴史的、文化的、社会的葛藤と内面的に深く関連しているかという点を追求しつづけてきたエリクソンならではの問題提起であったといえよう。

このことは、とりもなおさず、日本人にはアメリカ人とは異なる日本人特有の同一性の形成の過程があることを意味する。そしてわが国における青年たちにもみられる情緒障害を解明する上で、エリクソン理論はどのように有用であろうかという問題の検討が必要となるであろう。そこで、それに答えるものとして、非行少年の事例研究にエリクソンの人格発達理論を援用した我妻らの研究を紹介することにしよう。

我妻らは、非行少年の人格構造や行動傾向を、両親の人格検査結果や生育史、結婚生活史、少年の生育史などの環境要因との相互関係の中でとらえ、理解しようとし

た。また、適応過程における注目すべき問題として、依存と独立、しつけと自律、性的発達、攻撃と規制、孤立と社会化などを仮定して、考察を試みている。たとえば、連続強姦未遂事件を起こした少年の事例が報告されている。彼は、一見教育熱心で愛情深い父母のもとに、まじめで勤勉な子どもとして育ちながら、満十七歳になって間もなく、突然、行きずりの女の人をおそうという罪を犯した少年である。彼は少年院に送られたが、退院後も、女性に対する盗みやいたずらを繰返した。彼の父親は若い頃、かまぼこ屋の見習職人として働き、後に独立して、自宅で小規模なかまぼこ製造に従事していた。我妻らの分析によると、少年は、乳幼児期に母親が夫婦げんかのたびに彼を残して実家へ帰ったという経験から、母親の愛情の喪失をおそれ、その不安がいつまでも彼を母親に執着させた。また、愛情欲求が満たされないことから、かえって愛されることへのとらわれが大きくそのために外界を客観的にみることができないという弱い自我の持主であった。その上、父親は気まぐれで、苛酷なしつけをしたため、少年は父親を男性的役割模範として取り入れることができなかった。そのような彼が自

己の性的同一性を確立するという青年期の課題に直面したとき、危機が訪れたのである。すなわち、彼は性衝動をコントロールすることができず、また自我の現実吟味の能力が弱いことも重なって、現実的な解決手段を見いだすこともできず、女性に対する攻撃的な性行動という形で補償しようとして、女性に度々いたずらを繰返すことになったと解釈されている。

この他に六人の少年の事例が考察されているが、そこに浮き彫りにされた問題を要約すると、おおよそ次のようになる。まず第一に、超自我のモデルとして父親が不適切であったことをあげることができる。そもそも超自我は男の子が父親に同一化して、親の道德的側面を内面化することによって形成されると考えられている。ところがこれらの少年の父親は共通して、彼ら自身が精神的未熟で依存的であったり、情緒的に不安定であった。或は少年の幼少時に両親が離婚し、父親が不在のケースもあった。それらが原因で、健全な超自我の発達に阻害されたと考えられる。第二は、母親との愛情体験に問題があったことである。母親自身が未熟であったり、拒否的で、子どもの依存欲求を十分に満たしてやれなかった

場合や、或は経済的に忙しく、やさしく情愛を与える母親としての役割を果たせなかった場合である。このことが子どもにとって愛情喪失の不安となり、母親からの独立を困難にし、弱い自我を形成する一因となったと解されている。第三は、母親との間に初期の強い情緒的結合があって、基本的信頼感は一応獲得されたが、それに引きつづいておこる母子の心理的分離が十分でなかったという場合である。これはアメリカの場合と比較して、非常にきわだった特徴といえるであろう。たとえば、母親が夫との愛の挫折から、それを補償してくれる存在として子どもを溺愛したり、祖父母が「不憫な孫」への同情から保護過剰になりやすい。その結果、子どもに依存の発達段階への固着が生じ、自我の自立性が十分に育たなかった場合や、或は独立への切りかえがうまくいかなかった場合である。その上、養育者が保護過剰の態度をとる場合、子どもは行動を禁止されるという経験が少なく超自我の形成の不全が助長されることも考えられる。

このような少年たちが思春期を迎え、依存欲求や愛情欲求は満たされぬままに、力強く頼りになる男性になる道を模索したのである。彼らの攻撃的行動や非行はその

努力の結果であったと分析されている。このような場合、もし母親の十分な愛情に支えられて少年が母親との分離をなしとげ、外界に立ち向かっていう精神力に満ちた強い自我が育まれていたならば、たとえ父親への同一化に問題があったとしても、大きな障害は生じなかったかもしれないと想定される。或は、母親との愛情体験に欠けたとしても、父親との結びつきが安定していたならば、子どもの愛情体験はそれなりに安定したものになると推測される。さらに、たとえば、母親的養育の欠如を経験しない場合でも、父母の不和、相克が子どもの情緒的安定を損うことや、或は、不仲の父母双方の緩衝地帯として子どもが利用されたりして子どもは強い対人不信に陥り、大きな被害をこうむることも考えられる。このことは、両親が心理的に安定して、子どもに適切な関心をもって接することが、子どもの人格形成にとっていかに大切であるかをわれわれに再認識させ、同時に、そのような健全な夫婦関係の樹立を支援することの必要性をわれわれに痛感させる。

以上の考察は、たまたま男子ばかりの事例についてであったが、私が大学で心理相談にあずかった女子学生の

場合にも、同じように青年期特有の悩みが顕著であった。たとえば、はじめて親許から離れて下宿生活を始めた学生の中には、独立した自律的な大人に移行する過程の試練につまずき、或は親や家族の価値志向や生活形態を破ることへのとまどいから、うつ状態や心身症をおこして、一時的に現実逃避をはかる者がいる。彼女たちにはこれまでの進学一辺倒の生活や親の過保護からくる社会性の未熟さが目だった。或は、大学生活における個性のぶつかりあいや、はげしい競争の中で、今までずっと優等生できた彼女たちの多くは、自分の能力に疑問をもちはじめ、自己像のとらえ直しにせまられる。その緊張のもとで、エリクソンもアメリカの学生について指摘したように、勤勉感覚が崩壊し、読書や勉学に集中することができなくなつて、無断欠席をつづけ、或は留年するという者もいる。中には、母親との否定的同一化から、女性に対する伝統的な性別役割や価値観に対して極端に批判的な態度をとる者や、幼少時の女らしさのきびしいしつけに反発して、意図的に服装や身だしなみに関して女らしさを拒否するというような性的同一性の混乱を示す者もいる。それらは、形はそれぞれ異なるけれども、い

ずれの場合も、最終的な自己方向づけを決定するにあたって、より本質的な自己の生き方を模索する彼女たちの真剣な努力のあらわれであり、またエリクソンのいうように一過性の混乱であることが多い。しかしながら、葛藤の真只中にいる彼女たちは行きつく先が見えず、その暗さ、苦しさが永遠につづくのではないかと絶望的になる。そのような彼女たちに、そしてその親たちに、私は「明日のあなたは、今日のあなたではない」ということ、苦しむことが無駄ではないこと、そこには成長のあることを、地道に、しかも確信をもって伝える努力をしていく。そしてそのよりどころは、この葛藤を青年期特有の発達の課題であり、一過性の現象であるとみるエリクソン理論をおいて他にはないように私には思われるのである。

そしてまた、わが国の精神科医の多くは、若い患者たちと共に共通する特徴としてひ弱さと未熟さを指摘する。彼らは口先では強がりを言うが、実際には何一つ決断を下せぬ子どもたちであり、わずかのストレスや欲求不満にすぐ挫折し、一人で立ち向かえない若者たちであるという。そして、その原因を親の干渉過多とするのが一般的

な見方である。ちなみに、この若者たちにエリクソン理論を適用すると、親が子どもに過度に手をかけ、指図し、或は親の意志や考え方を子どもに押しつけてやらせた結果、子どもの自律性や自発性の発達が阻害され、健全な人格の成熟がさまたげられたということになる。つまり、青年期になり、子どもが自らの将来を選びとろうとするときに、幼児期の自己統制能力や自律性や自発性の訓練が適切でなかったことが障害となつて、青年期的課題の解決に困難をきたしたと考えられるのである。しかしわが国の場合、アメリカや西欧にくらべて、母親と乳児との身体的接触が多く、母親的世話が十分に行なわれているのが文化的特徴であるときえいわれているので、まず初期の安全感や信頼感は形成されやすいとみるべきであろう。したがって問題は、依存欲求が満たされた段階から、幼児の能力の発達に応じて自律性を育てながら徐々に独立へと向かわせるその切りかえの過程にあることになる。つまり、自律の訓練がおそすぎたり、欠けたりすることのないようにもっと細かな配慮をする必要があるということになる。そして、そのような患者たちは、もう一度、親子の間で信頼感を取りもどす努力

をすることによって、まず自己価値感を再確認し、また親や周囲の人々の支援をえて、現実と相互性に向つて学び直すことができるようになる。その修復の努力は自己に内在する力強い回復力によってなされるとエリクソンはいう。

このように考えてくると、『幼児期と社会』の中で示された漸成論的発達分化の理論は、幼児期について、その時期だけを問題にするのではなく、その本當の評価はできないということを強調していることが明らかになる。すなわち、人が各発達段階で危機を解決したとしても、人生のその後の変化がそれらの危機の蘇生を促すこともある。しかしまた、発達が各段階を通じてたとえ順調でなくても、後の段階で補われたり、訂正されたりしようと考へられている。さらに青年期になると、若者は一連の決定を行ないはじめる。ある決定は過去に経験したものの繰返しであるが、新しい可能性にかける決定もあるとする同一性の形成の概念は、青年とは幼児期の心理学的な出来事の単なる不可避的表現ではないというエリクソンの見解を一層明瞭に示している。そして青年が示す情緒的障害の多くは、自己の方向づけを決定するにあた

ってあらわれるまさに正常な発達の危機の様相としてと
らえられており、そこには安易な因果説の入りこむ余地
はない。先に考察したルター研究も、むしろ万事順調に
行かなかった場合の方が、かえて傑出した人物に成長し
うることを物語っている。しかしながら、同時にルター
は、われわれがかかえる問題や達成しようとする課題に
もそれぞれ歴史があるということもわれわれに示してく
れた。その歴史は、われわれの幼児期にまでさかのぼる
のである。エリクソンにとって、幼児期はまさに人間と
しての始まりの舞台として位置づけられているのであ
る。

(津田塾大学)

追加参考文献

我妻洋編『非行少年の事例研究』誠信書房一九七三

